

「実に、恵みによる」

詩篇
エペソ人への手紙

第32章6節～7節
第2章1節～10節

説教 岡村 恒牧師

「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。」(8節)この言葉が、大きな声で叫ばれています。

1章には、神が世界をお造りになる前から、あなたの救いをお定め下さり、世の終わりに味わう栄光までも用意して下さったことを明確に語ってきました。続く2章に来て、御言葉は「かつて」と今を比べながら、救いの前後の違いを明らかにします。

住居を大幅に改築して、そこに住む人たちが問題を解決していく、というテレビ番組があります。土台や骨組みを残したままで、部屋割りや水回りなどを新しくして生活を一新するという話です。私たちは、自分自身の人生についても、ともするとただの〈改築〉で問題が解決するような誤解をしてしまいます。聖書の中の言葉をつまみ喰いして、ほんの少しだけより良い人間になって、昨日よりも少しだけ幸せな人生を送れたら良い、そう考えて聖書を開く人は少なくありません。

聖書は私たちのかつての姿をこう語ります。「さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者」(1節)だった。「わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であった。」(3節)

パウロ自身は、聖書に精通し、律法を命がけで守って生きてきた人物です。罪過と罪、神の怒りとは無縁な者だと思ってきました。神に近づく道を知っていたはずなのです。しかし、「この世のならわし(アイオン)」や「空中の権を持つ君」に支配されてきたことを知りました。様々な習慣や風習、人々が必死で守る掟のようなものも、人を縛り従わせる〈神〉のように振る舞ってきたのです。神でないものが、神と人との間に立ちはだかってきました。私たちの心の中に巣くうようにして、私たちが神に近づくことを妨げてきたのです。

私たちの肉の欲や、肉の思いが、真実を受け入れることを妨げます。何より、主イエス・キリストの〈復活〉を信じることに、多くの人が困難を覚え、つまずきます。十字架にお架かりになったお方を、神が死人の中から引き上げて下さり、このお方は今も生きて働いておられる。この一点にキリスト教会全体がかかっています。

この真理を信じることができない「怒りの子」であった私たちを、「あわれみに富む神」が、その大きな愛をもって選びとって下さいました。

神は、「キリストと共に生かし—あなたがたの救われたのは、恵みによるのである—キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さった。」(5節-6節)と言い始めた途端パウロは、「あなたがたの救われたのは、恵みによるのである」と叫びます。命がけで神の言葉に従ってきたパウロの中で、繰り返す警告が響くのです。わたしはこんなに神を愛し、神に従って生きてきた、と考え始めた途端、いや、ただ「恵みによる」、という警告が響くのです。まるで自分の救いが、自分自身の力によるかのように思い違いをし始めるたびに、「実に、恵みにより、信仰による」(8節)ことを思い起こしたのです。

あわれみ深い神によって、「キリストと共に」、生かされ、よみがえられ、既に天上の座が約束されていることを、私たちは繰り返し思い起こします。もう既に、キリストご自身に離れがたく結びつけられて生かされていることを、繰り返し知るのです。決して行いによるのでない、という断言を聞き、「神の賜物による」(8節)ことを味わい知ります。

土台のないところで改築はできません。しかし確かな土台さえあれば、そこには確かな建物が建てあげられることができます。神の憐れみにより、神に喜ばれる行いをして生きるために、私たちは救われたのです。土台を持たない私たちが神は、「神の作品」としてイエス・キリストによってお造り下さいました。だから、私たちは、神を指し、神の恵みを証しし、神の作品であることを喜んで歩んだら良いのです。

大阪教会の聖堂が、今から90年前、神の栄光を表すために建てられました。礼拝において御言葉が語られ、祈りが捧げられ、神の御名がほめられた時、この建物が建てられた目的がはっきりし、建物自体が本来の輝きを見せます。私たちの人生も同じです。神をほめたたえて歩む時、私たち一人一人がその目的に合致した歩みをし、最も美しい姿を見せることができるのです。実に、恵みにより、わたしたちの救いは実現したのです。

(記 岡村 恒)